報告（4）

〝話〟の理解について

谷口和子

幼児の話すこと、聞くこと、即ち言語の指導をどうするか、

よい童話の基準

常に正しい言葉を聞かせることについて

数々のことばあそび

語いますことについて

標準語、幼児語について

幼児自ら語させることについて

理解語と使用語の差について

細かく考えてゆけば数多くの問題をもつているし、又いろいろ論じられてもいる。私はなるべく子供の側にたつてこれらのことを考えてゆきたいと思つている。多くの問題の中、〝話〟の理解について次の二つの観点から調べてみたことを記してみたい。

一、四才の子供と五才の子供と

自分の手許に三年保育の子供達がいないのが残念であるが、四才と五才の子供を比べても、お話の理解のしかたが全然ちがう。その発達段階をどうやつてとらえるか。これも大きな問題である。目的を果したとはとても言える事ではないが、その年はじめにこんなことをしてみた。おこなつた時期は六月で年少の組は集団生活にはいつて二ケ月たつた頃である。

目的　一つのお話を　四才のグループと五才のグループでは、どの様な理解のしかたのちがいがあるか調べてみたい。

方法　同じ条件で四才のグループと五才のグループに別々に一つの話を聞かせ　これを家に帰つてから保護者に報告させかきとつてもらう。

取材　子供達に大よそ適当であろうと見当がつけられるものでなければならないが、それを保護者達が知つていては整理に都合がわるい。そこでNHKの昔々あつたとさ…は時々は子供も聞いている話で、これなら話の内容はまず適当と思われるので、まだ放送されていない分を借りて来て行うことにする。

「話の題は」〝もぐらとお日様〟というので内容を簡単にかくと、

①もぐらは朝ねぼうが大好きでした。ねぼうをしたくても朝になるとお日様がまぶしくてねていられません。ブツブツいいながら考えたことは弓矢でやつつけてしまうこ

とでした。

②途中でかえるに会いました。かえるがどこへ出かけるのかと尋ね、もぐらはこの弓矢でお日様をやつけるのだと答えました。

③びつくりしたかえるは、そのことを高い木にのぼつて「お日様ヤーイ」といいつけます。何度も呼んでくたびれた頃お日様にそのことが聞えお礼をいわれました。ねぼうの好きななまけものゝもぐらはその時から、お日様にめくらにされて目がみえなくなりました。

これを①②③の三つの段階における三点満点として平均点をとつてみると、四才児(年少)のグループは1.5で五才児(年長)のグループは2.1になりました。この場合一点与えるか与えないかは、筋が通りあの話のあの部分とわかればよい、即ち子供達の記憶力によることにした。

①②③のどの部分をどれだけの子供がおぼえていたかを表にすると、A図の様になる。

①②③全部完全におぼえていた子供の数については、年長と年少の間に有意義な差は少ないが、間をとばして①と③だけおぼえているのや②の会話の部分だけを報告した子供が年少組にいること。何もおぼえて帰れなかつた子供が年少組に9人もいることはやはり年令差のある事を示している。

おぼえていた部分	年長	年少	計
①②③	12	10	30
①	7	3	
②	4	2	
③	0	2	
①③	3	0	
②③	2	5	
①	0	1	
0	2	9	

A図

・登場人物？　をもぐら、お日様、かえる、弓矢、高い木として全部出て来たら五点として数えてみると、B図の様な結果になつた。

点＼組別	年長	年少
5	12	10
4	13	9
3	5	7
2	0	2
1	0	2
0	0	2

B図

これらの資料から得られる結論は六月頃にはこのお話は年長組には丁度難かしすぎも、易しすぎもせず適当であり、年少組にとつては、やや背のびした処にある話材であるといえよう。

この調査を整理していて面白いことがあつた。それは女の子で弓矢を知らない子供が話の前後で使用目的を理解したらしく、ピストルの如きものと思い、更にピストルとして報告しているのがあつた。こんなこともあるので一つ二つの難解な語句のために話を難かしくするという様なことはない様である。かえつてそれを機会に、子供の語いを増やす様にもつてゆくべきではないだろうか。

この調査とは別に二十数語の(単語)をあげて理解の程度を調べた時に、〃親切〃〃危険〃〃巡査〃の語については、半分以上の子供が理解していたが、〃農家〃〃登校〃の言葉のわからない子供が三分の二程いた。都会の幼稚園の子供であること、学校ではないこと等で日常つかわれていない言葉であるから無理のない話である。それに比べて同じ様な難かしさと思われる〃親切〃〃危険〃巡査等は日常それの具体的なものにぶつかり又話もしているので彼等の語いになつている。四才から五才、六才になるにつれて子供達はおしやべりになつてくる。此れは又み方を変えれば、この時期は言語活動の盛んな、又それの訓練をする時期でもあろう。その時によい方

法で私共保育者は彼等の手助すけをしてやりたいものと思う。

二、紙芝居とお話

絵を使つて話をする紙芝居の場合の子供の理解の状態は、たゞお話をするだけの場合と又異つている様だ。紙芝居の場合話の内容はずつと高度のものでも子供達は理解出来る。そして年少の子供程視覚の補助があるとないでは理解のしかたがちがいがある。

お話について調査してみたのは六月であるが、一月たつて七月に紙芝居について同じ目的で調べてみた。なるべく保護者の知らないもの、子供達も今まで聞いたことがないものと思い〃小人の汽車〃を選んだ。

登場するものは、

1、おじいさん
2、おばあさん
3、かぼちや
4、おむすび
5、小　人
6、おもちやの汽車
7、かみなり

内容を簡単に書くと、

①おじいさんとおばあさんが仲よくくらしていた。
②おじいさんはおにぎりを三つ作つてもらつて畑へ行つた。
③畑ではたらいてからおむすびをたべた。
④おむすびを二つ食べて一つはおみやげにしてひるねをした。
⑤小人が出て来ておむすびを食べた。
⑥眼をさましたおじいさんが、おむすびをさがすと小人が出て来てあやまり、玩具の汽車をかしてくれた。
⑦おじいさんがまたぐとどんどん空高く走つて行つた。
⑧雷の親子に汽車がぶつかつた。
⑨雷がおちた。
⑩気がついたおじいさんは自分の家の前に立つていた。
⑪心配していたおばあさんに今までのことを話してあげた。

二度目の同じ様な調査に対しては、書き取つて下さる保護者の人が熱心になりすぎた結果子供の報告が脚色されたりして残念なのもあつたが次の様な結果があらわれた。

内容を⑪にわけ11点満点として平均は、

年長組八・四六
年少組七・〇〇

登場するものを前述の7個7点満点として、年長組五・七一
年少組五・三五　となつた。

内容の方について〃もぐらとお日様〃の場合とC図の様な比較をしてみると、

もぐらとお日様

年長 $\frac{8.46}{11}=\frac{24.38}{33}$ ⋮ $\frac{2.1}{3}=\frac{24.1}{33}$ ⋮ $\frac{7.6}{33}$ ⋮ $\frac{16.5}{33}$

（両者の差） $\frac{3.38}{33}$

年少 $\frac{7}{11}=\frac{21}{33}$　$\frac{1.5}{3}=\frac{16.5}{33}$

C　図

小人と汽車

六月と七月では一ケ月の成長があるにしても、相当すじが複雑になり、登場人物も多い小人と汽車が、もぐらとお日様よりよくおぼえていた。年長組と年少組の平均点の差は小人と汽車の方が少なかつた。これら二つの事

がらはどちらも画面がそれの理解をたすけたといえると思う。特に小さい子供達の方が絵があつた方が理解しやすい。

記憶しているその程度で直ちにそのまま、理解力とは呼べないが、参考にはなると思う。大人の与える話を子供の側にたつてその消化の程度をはかつてみたいと考えてやつてみた一つの結果である。

出来ることなら、子供達の発達の段階に即して、一寸脊のびして手をのばせばとゞくとか或いは聞かせて楽しませるに適当とか区別がつく様にして一番低いところから一段高く聞かせる材料を豊かにそろえたいものと思う。

話の理解について考える時、子供達は何を望み、どんなものを喜ぶかということをもつと適確につかみたいと思う。それで子供達自信に紙芝居をつくらせ、話をさせてみた。その中で今までに感じたことをのべてみたい。

子供の作つた話『電気機関車』

電気機関車が観音様の所を走つてゆきます。お日様がてかてか照つています。駅でキリンと象が急いで乗ろうとしてキリンは首の処をけがして象は頭の所をけがしたの。兎の車掌さんは、「いけませんね」つていゝながら繃帯をしてくれたの、兎の車掌さんは「いけませんね」つて云い乍ら繃帯をしてくれたの。キリンは首にね。象は頭にね。それでライオンの駅長さんの所へあやまりにいつたの。

「君行きたまえ」「君先に行きたまえ」つて二人でなかなかあやまらないでうろうろしていたの。それからあやまつたの。

二人とも電気機関車にのつて首出して見ていると、ロケット号が飛んで来たの。それで「二ボルトにして早くして下さい」つて運転手に頼んだの。

兎の車掌さんが「ロケット号の火が目にはいるから首を出してはいけませんよ」つていつたの。駅に着く前に〇ボルトにしたの。キリンが早く降りようとして窓のふちに頭をぶつつけたの。あんまりいたくぶつつけたので、たんかで病院に入れられたの。なおつたから急いで象にあいにいつたの。電気機関車に象がのつていたの。それでおしまい。

これは五才の男の子の作つたお話である。もつとも、これにはいわゆる紙芝居の同じ子供が書いた絵が何枚かついていて、説明の足りない所はそれが果してくれるのであるが、大人達の概念ではもつと筋が通つて繰返しがはいり、リズミカルで面白いであろうと思われる童話や紙芝居よりもずつとこのお話を同年の他の子供達は喜んだ。真新しいものに対する喜こびに満ちていた。

小さい子供は何でも擬人化する。

動物も自分達と同じ様な生活をしていると思つている。

動物が主人公で活動する童話を好む。

複雑な筋より簡単な筋を好む。

子供達はどんなお話を喜こぶかということに対してふつう今までいわれていることは以上の様なものであるが、どれもうなずける。然し其の上に私達は考えなければならないことがある。子供の持つているリアリスティックな科学的な知識を無視してはならない。何時の時代の子供もドンブラコッコの桃太郎やカチカチ山を同じ様に楽しんでいるとは思えない。聞かせる材料も時の流れの中で吟味されるべきだと思う。現実の生活に根をおろし、

科学的な裏ずけをもち、その中で子供達が自由に想像し空想し夢をもつものを選びたいと思う。

二年保育の子供三十数名が入園した当時どんなお話を今までに聞いて知つているか調べた所をその多かつた順に並べると、

桃太郎、うさぎとかめ、シンデレラ、白雪姫、浦島太郎、かちかち山、さるかに、花さかじじい、舌きりすずめ、竹取物語、一寸法師、バンビ、ピノキオ、ガリバー、赤ずきん、其の他となつた。

保護者が見にいつたか、幼児自身がみてきたか、ともかく――線のお話は明らかに、最近上映された色彩映画の影響であろうと思われる。此の辺にも保護者が時の流れにおくれてならない一つの暗示がある様に思う。

（東京学芸大学附属幼稚園教諭）

§

§

§

◇フレーベル館社長 水害各地を御見舞◇

去る六月末、九州各地を襲つた豪雨により甚大な被害を受けられた幼稚園、保育所を御見舞のため、七月八日、フレーベル館小高社長は、社員同道九州に向け出発いたしましたが、九州では、福岡、大分、熊本、佐賀等各県の水害地の園を約二十日間にわたつて御見舞し、同月二十七日、帰社いたしました。

殊に被害を多く受けられた地方は、筑後川の沿岸、及び熊本市内であり、この地方の幼稚園、保育所の中には、机も椅子も、一つ残らず流失してしまい、流失を免れたピアノやオルガンも、泥にまみれ、全く使用出来ないという、まことにお気の毒な状態の園もあつたとのこと。その中にも早速園長先生を始め保母先生方の復興に御努力されている御元気な姿が何処の園でも見られたと云うことです。

私達一同は、この度水害を受けられた各幼稚園保育所の一日も早く御復興されんことを心から御祈りいたしております。

（編集部）

◇お知らせ◇

――津守真先生御帰国のこと――

長い間渡米されておられ、又本誌に度々〝アメリカ通信〟をお寄せ下されておられました津守真先生は、この度数々の御研究をつまれ、八月五日、無事東京にお帰りになりました。

幼児の教育　第三巻　第十号
定価　金五十円
昭和二十八年十月一日発行
東京都中野区千光前町一〇
編集兼発行者　倉橋惣三
東京都文京区大塚町三十五
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都板橋区志村町五番地
印刷所　凸版印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町二ノ五
発売所　株式会社フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番
○誌御購読について注文申込その他はすべて発賣所フレーベル館宛願います